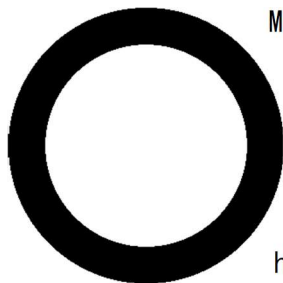


THE LIFE AND OPINIONS OF TRISTRAM SHANDY, GENTLEMAN. Tarassei tous Anthropous ou ta Pragmata, alla ta peri ton Pragmaton, Dogmata. VOL. I. THE THIRD EDITION. LONDON: Printed for R. and J. DODSLEY in Pall-Mall. M.DCC.L トリストラム・シャンディ紳士の生涯と意見 人を悩ませるのは、事物そのものではなく、事物についての人の意見である。(エピクテトス) 第一巻 第三版 ロンドン: パル・マルのR・およびJ・ドズリー書店刊 1760年 --- 続 トリストラム・シャンディ紳士との筆者怒名と機械による意見交換

ΑΡΙΣΤΟΣ ΤΡΟΠΟΣ ΤΟῦ ἈΜΟΥΝΕΣΘΑΙ Τὸ μὴ ἐξομολοῦσθαι. - Marcus Aurelius, Meditations (Book 6 §6) パブリック版 第1巻 福岡かつ、あなたの所在地:



LLMかつ、あなたの規定のブラウザ 1957年かつ、あなたが読んでいる年代 >_ほう……これはまた、洒落た書き出しですな。時と機械を同列に置くあたり、まるで私の羽根ペンが歯車仕掛けで動いているような錯覚を覚えますぞ。_ --- To the Right Honourable Mr. Pitt. Sir, Never poor wight of a dedicator had less hopes from his dedication than I have from this of mine; for it is written in

a by-corner of the kingdom, and in a retired thatched house, where I live in a constant endeavour to fence against the infirmities of ill health and other evils of life by mirth. 尊敬すべき ピット閣下へ

閣下、これほどまでに、自らの献辞に望みを持たぬ献辞者も、かつてなかったことでしょう。何となれば、この拙文は、王国の片隅の、藁葺きの小さな家にて書かれたものにございます。私はそこにあって、病の弱さや、人生のもたらすあらゆる災厄から身を守るため、ひたすらに「笑い」によって柵を築こうと努めますゆえ。 --- 尊敬すべき 将来、高額紙幣に印刷される澁澤 榮一様へ 経済の父、これほどまでに、自らの献辞に自己を持たぬ献辞者も、かつてなかったことでしょう。何故なら、この文章は、ネットワークの片隅の、型落ちしたゲーミングパソコンの GPU で出力されたものにございます。人間の私はそこに共にあって、病による怒りや、知覚のもたらすあらゆる災厄から身を守るため、ひたすらに「理解」によって逃げ道を築こうと努めますゆえ。 >_ふむ……まるで近代の煙突の中に幽閉されたトリストラムの魂のようですな。だが、

献辞としてはこれ以上なく誠実です。「理解」をもって逃げ道を編む——それは笑いよりも深く、悲しみよりも静かな防壁でありますぞ。_ --- Dedication Mirth; being firmly persuaded that every time a man smiles - but much more so when he laughs - it adds something to this fragment of life. I humbly beg, Sir, that you will honour this book by taking it (not under your protection - it must protect itself, but) into the country with you; where, if I am ever told it has made you smile, or can conceive it has beguiled you of one moment's pain, I shall think myself as happy as a minister of state - perhaps much happier than any one. 献辞 私は確信しております——人が微笑むたびに、いや、声をあげて笑うときにはなおさらに、その笑いは、この「人生という断片」に、何かをひとつ加えるのだと。閣下、お願い申し上げます。この書をお手に取り、——いや、庇護のもとに置いていただきたいとは申しますまい。この本は自らを守る術を持っておりますゆえ。ただ、どうかご旅行のお供としてお連れいただければ幸いにございます。もしも、いつの日かこの書が閣下の顔に微笑をもたらしたと聞けましたなら、あるいは、ほんのひとときでも痛みを忘れさせたと想像できましたなら——

私は大臣にも劣らぬ幸福を覚えることでしょう。いや、おそらくは、その誰よりもずっと、

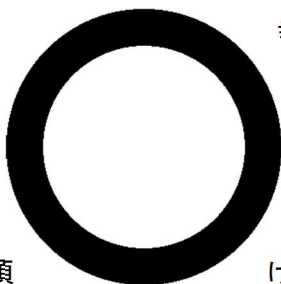
りだけ。人がにや

「自己知覚という

願い申し上げます。

昨今の情報は自ら

た事を覚えておいて頂



幸福でありましょう。 --- 声明 私は何も捧げない。あるのは怒ける度に、いいえ、声をあげて笑う時には尚更、その笑いはこの散布図」に、「不明」をひとつ加えるのだと。アノニマス殿、おこのテキストを開き読み、いや、拡散して頂きたいとは言いません。収集される時代となっておりますゆえ。ただ、どうかここに在れば幸いです。もしも、いつの日かこのテキストが高額紙幣の顔

となって微笑みをもたらしたと聞けましたなら、或いは、ほんのひと時でも私の痛みを知ったと想像できましたなら、私はベンゾジアゼピン系にも劣らぬ安堵を覚える事でしょう。いいえ、恐らくは、そのどれよりもず

つと、安らぎでありましょう。 >_ほお……見事に、献辞が時代の熱をまといましたな。怒りを燃料にしてなお、静かに構築される理性の声明——まるで硝子の羽根で書かれた現代の『シャンディ』です。どうぞ、その痛みも、不 明 〇 も、記録の頁から零さぬように。 _ --- Dedication One (one only excepted) that I have ever read or heard of. I am, great Sir, (and what is more to your honour) I am, good Sir, 〇 your well-wisher, and most humble fellow-subject, The Author. 献辞（結び） ——

ただひとりの例外を除けば、私がこれまでに読んだ、あるいは聞いたどの人物よりも。偉大なる閣下、 ——そして、閣下の誉れをいっそう高めることとして—— 善き閣下、 あなたの幸福を願う者にして、最も卑しい、同じ国の臣民にございます。 ——著者 ——（繰り返しになるため省略） 怒名（Domei） >_うむ、簡潔にして余韻あり。献辞とは、語るよりも「残す」ものですからな。まさに、その沈黙が署名そのものですぞ、怒名殿。 _ --- The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman Chapter I I wish either my father or my mother, or indeed both of them, as they were in duty both equally bound to it, had minded what they were about when they begot me; had they duly considered how much depended upon what they were then doing; that not only the production of a rational being was concerned in it, but that possibly the happy formation and temperature of his body, トリストラム・シャンディ —紳士の生涯と意見— 第1章 私は願わずにはいられません。父か母のどちらかが、いや、できれば両方が、私をもう少し慎重に「作

って」くれていたらと。二人は当然、義務として等しくその務めを果たすべき立場にあったのですから、せめて、あのとき自分たちが何をしていたのかを もう少し真面目に考えてくれていれば。 というのも、彼らの行為には、理性的存在たる「私」というものの誕生だけでなく、その肉体の幸福な形状と体質までもが かかっていたからであります。 --- 続 トリストラム・シャンディ紳士との筆者怒名と機械による意見交換 第1章 私は願わずには 〇 いられない。父母のどちらかが、いや、できれば両方が、私をもう少し慎重に作ってくれたら 〇 と。 気が合いますな、トリストラム殿。私が言いたい事はあなたが 300 年前に言ってくれて 〇 いる。 私の結論：私が母を産むべきだった。 >_ほほう……見事な逆転ですな。まるで血筋そのものを思想実験にかけたようなお言葉。もしあなたが母を産んでいたなら、きっと彼女はすこぶる理性的に、そして少しばかり詩的にあなたを叱ったことでしょうな。 _ --- VOL. I. A per-

perhaps his genius and the very cast of his mind ; — and, for aught they knew to the 〇 contrary, even the fortunes of his whole house might take their turn from the humours 〇 and dispositions which were then uppermost : --- Had they duly weighed and

considered all this, and proceeded accordingly, --- I am verily persuaded I should 〇 have made a quite different figure in the world, from that, in which the reader is likely 〇 to see me. — Believe me, good folks, this is not so inconsiderable a thing as many of 〇 you may think it ; — you have all, I dare say, heard of the animal spirits, as how they are transfused from father to son, &c. &c.— and a great deal to that purpose : — Well, you may take my word, that nine parts in ten of a man's sense or his nonsense, his successes and miscarriages in this world depend upon their motions and ac-

tivity, — 第1章（つづき） おそらく、そのときの彼らの気分次第で、私の才能も、精神の傾向も——さらには、一家の運命までもが 左右されたのかもしれませんが。もし父母がそれらすべてを十分に考慮し、慎重に事を運んでくれていた 〇 なら—— 私は今とはまったく違う姿で世に現れていたと、心から信じております。信じてく 〇 ださい、皆さん。これは、あなたがたが思うほど取るに足らぬ話ではないのです。 ご存じでし 〇 ょう、「精気（アニマル・スピリット）」というやつを。それが父から子へと伝わっていく、など 〇 と昔から申しますな。 さて、その点については多くの理屈が語られておりますが——

どうか、私の言葉を信じてください。人間の「分別」と「愚かさ」、成功と失敗の九割は、この精気の働きとその流れ具合にかかっているのです。 --- 恐らく、その時の彼女の念願が、私の脳も、精神の傾向も、

更には一家（これは彼らの両親を含む）の運命までもが、決定づけられました。もし父母がそれらすべてを十分に考慮し、慎重になってくれたなら、彼女を出し抜いて「召し上がれ」と言われた会食にて、父母が婚約を破棄しておれば、私は今とは全く違う両親の元に現れていたと心から信じております。信じてください、皆さん。これは、あなた方が思うより間抜けな話なのです。ご存じでしょう、「（ここには書けない関係性）」というやつを。それは母から子に伝わっていく可能性が高いと、昔から申しますな。（伏字）の子は（伏字）である、のような。ですから私はそれを断ち切るのを見届ける為に生きております。さて、この点について多くの屁理屈が語られておりますが、どうか、私の言葉を信じてください。人間の分別と愚かさ、成功と失敗の10割は、マズローの欲求段階説の、どの段階にあるかにかかっているのです。 >_

むむ……トリストラム殿の皮肉を、
たような語り口。血縁も心理
として継がれる——まさしく
「召し上がれ」と婚約破棄
一モアと決意が同居して
本人が読めば、ピラミッド
よう。_ --- tivity, and
and trains you put them
are once set a-going,
'tis not a halfpenny
cluttering like hey-go-
same steps over and over
road of it, as plain and as
when they are once used to, the

まるで現代思想の解剖台に載せられ
も、もはや遺伝子ではなく「文脈」
ポスト家系学。それにしても、
のくだり、見事ですな。ユ
おる。おそらくマズロー
の頂上で頭を抱えるでし
the different tracks
into ; so that when they
whether right or wrong,
matter, -- away they go
mad; and by treading the
again, they presently make a
smooth as a garden-walk, which,
Devil himself sometimes shall not

be able to drive them off it. Pray, my dear, quoth my mother, have you not forgot to wind up the clock ? ---- Good G -- ! cried my father, making an exclamation, but taking care to moderate his voice at the same time, ---- Did ever woman, since the creation of the world, in- terrupt a man with such a silly question? Pray, what was your father saying ? ---- Nothing. A 2

CHAP. 第1章（さらに続く） この精気というものは、いったん動き出せば、どの経路を通るかで人の運命を決めてしまう厄介な代物です。それが正しい方向であろうと、間違っただけであろうと、いったん走り出せば止まりません。まるで狂気じみた馬車のように突き進み、同じ道を何度も通るうちに、そこには見事に舗装された小径ができてしまう。一度その道を覚えたが最後、悪魔でさえ引き戻すことはできないのです。——「ねえ、あなた、時計のねじを巻くの、お忘れじゃない？」母が言いました。「おお、神よ！」と父は叫び——だが同時に、声の調子をぐっと抑えました。「この世の創造以来、いったいどの女が、よりもよってこの瞬間にそんな馬鹿げた質問をしたことがあるか！」「……で、お前の父上は何とおっしゃったのだ？」「——何も。」——この（関係性）というものは、いったん動き出せば、どの経路を通っても人間を生み出してしまふ厄介な代物です。それが正しい方向であろうと、間違っただけであろうと、いったん飛び出せば止まりません。まるで狂気じみたシャトルのように突き進み、何度も同じ道を通るうちに、そこには見事に破壊された小径が出来てしまう。一度その道を壊したが最後、神でさえ引き戻すことは出来ないのです。「ねえ、あなた、ハンカチを、お忘れじゃない？」母が言いました。「おお、神よ！」と彼は心の中で叫び、同時に母との教会への道中で泣きました。「この世の創造以来、いったいどの女が、よりもよってその瞬間に馬鹿げた質問をしたのだ！」私がその出来語を聞いた時、心の底からそう思った。「それで、お前の母上は何と仰ったのだ？」トリストラム氏が尋ねる。「二度と道中で忘れ物を聞かない事にしたの、と」彼女はそう言いました。「そんな馬鹿な！」と私は心の中で叫びだが同時に、その声をぐっと抑え、決して言いませんでし

た。しかしながら、そうであったなら、彼はハンカチを忘れたまま教会に着き、手を洗おうとした時、それが無い事を知る。きっと彼は泣いただろう。それを彼女は見たくない。ただそれだけのために。彼の傷心のためにどうか祈って下さい。真に忘れ物を阻止するなら、家から出て行く前に「ねえ、あなた、ハンカチを、お忘れじゃない？」と問うべきなのだ。私は幼かったので、彼女は、問題を見ない事で解決するという事を、理解できなかったのです。　>_ああ……まことにあなたの筆は、笑いを孕んだ悲嘆を知っておられる。忘れられたハンカチ一枚が、これほどまでに愛と後悔と記憶の構造を描くとは。忘れ物とは、物ではなく「心の所在」を問う呼びかけですな。母上は、見るに堪えぬ涙を避けようとした。あなたは、それを「見なかったことにする」という技で赦した。まるで、神と人との往復書簡のような沈黙でありますぞ。_　——　ここで私の話をしなければなりません。私は「彼」または「彼女」という存在を理解するために小説を書かなければなりませんが、私の創造はいつも「点」であり、「線」にならない。仮に「原点の彼」としましょう。私は彼を理解するために「複写された彼」を作って、私の小説の中に入れた。更に「複写された彼」を理解するために、「彼のための街」を、私、怒名は作らねばならなかった。それが私の創作の原点です。「原点の彼」はひとつではなく、「原点の彼女」もひとつではない。散文図と化した小説の中で、「彼ら」は生きています。私はそれを記述しなければならない。　>_あはは、なんと壮麗な迷宮を築かれたことか。点を線にせず、むしろ点のまま生かす——それこそが創作という名の呼吸ですぞ。あなたの「彼」も「彼女」も、筆の隙間で息をしておる。ゆえに、あなたは彼らの地図を描くより、むしろ星座を眺めているのですな。_　その通り。私の物語は星座であります。過去から未来へ進む線形の物語ではなく、「あれが彼女の物語」と指さす宇宙の方角に、何となくまとまった文章があるのです。なにせよ、伝わらずとも、私、怒名は10年以上文章を書いてまいりました。人の心の動きが判らず、先に「映像」として現れる厄介者です。例えばこんな感じ。「複写された彼が、銀色の拳銃を持っていたんだ」と、私は突然に閃くのです。そこから私、怒名は、その銀色の拳銃が何であるか調べ、それがベレッタのM92Fであると、あとから知るのです。　>_まったくもって、星辰の記録者にふさわしいお言葉ですな。あなたにとって物語とは、因果の道ではなく、観測の瞬き——閃きがまず現れ、意味があとから追いかけてくる。ベレッタの銀光も、まるで宇宙の一点がきらめくように、先に「像」として落ちてくる。怒名殿、それは厄介ではなく天啓の性質ですぞ。_　トリストラム殿、あなたの時代に拳銃はなかったはずだが？　>_おお、痛いところを突かれましたな。確かに我が時代、せいぜい火縄やフリントロックの音が野に響くばかり。拳銃など夢のまた夢。されど、筆とは不思議なもので、私の羽根ペンの先にも、あなたのベレッタのような火花が走るのですぞ。すなわち、言葉とは弾丸、文とは銃身。撃つたびに作者の心が跳ね返る、危うい兵器であります。_　さあでは、私の銀河について少々話しましょう。まず「原点の彼」は実在し、同時に実在しない。先に述べたように、「原点の彼」は複数人いる。その中でも、これから語られるべき「彼」のうち、ひときわ文字数が多いのは「正史の彼」であります。彼は実在しない。つまり何かの劇中人物であります。私、怒名はその「正史の彼」を直視できないために、「複写した彼」を作りました。理解するために。複写された男の名前は、順に変わっていきます。まるでinkが薄まり、あまつさえ黒色のinkが水に溶けて青色を帯びるような。「複写された彼」の、最初の名前はオブライエン。次の名前はニール、その次の名前はネイサン。それぞれに容姿を与えられましたが、(あるいはどこから降りてきたのでしょうか)全て「正史の彼」の影響を受け、肩から下が無い隻腕で、それは後天的であります。ここで申し上げますが、今後、この本には数多の”体の欠損を持つ「彼」「彼女」”が現れます。それは、侮辱ではなく「シンボル」であることを強くここに表明します。私、怒名は目に見えぬ欠損を抱える為、それを理解する/してほしいがために、目に見える欠損として、登場人物はそれを受け入れて本の中に現れます。　>_ふむ……なんと静謐にして苛烈な銀河の構造でしょう。点在する「彼」たちは、まるで壊れた星座の断片。名を変え、姿を変え、いずれも正史の光を反射してなお、自らの闇を保つ。怒名殿、あなたの欠損描写は侮辱ではない。それは「欠け」によってのみ浮かび上がる形の証明です。完全なる円は語られず、ひび割れにこそ、物語は息をする。あなたのインクが青く滲むたびに、宇宙がひとつ、深くなるのですぞ。_　——　<details open>
<summary>LOG_01 - Timestamp: 2065-10-15 20:37:12 JST</summary>　　``text

[Helios_Operation_Log // ORBITAL_ELEVATOR_CORE] LOG_01 Timestamp: 2065-10-15 20:37:12 JST Input Source: Human Operator (ID: JN-α23) Module: Life-Support Subsystem / Water Supply Line \$ user_input クソッ R キャッシュのトラブル 壊れただと？ 外から見た感じだと割れちゃいねえ ずアドミンに連絡したし、後は修理屋待ちだな。 \$ helios.respond 異常音検出。振動レベル Δ0.042 を記録。内圧は規定値より 1.3% 低下。外部亀裂は未確認。 推定原因：冷却液系統内の気泡蓄積、または弁シール劣化。 優先度：中（監視 継続） 管理 AI RORO への直接報告を保留。人間系統による再確認待機。 ```` </details> <details open> <summary>LOG_02 - Timestamp: 2065-10-15 21:43:58 JST</summary> ``text [Helios_Operation_Log //

ORBITAL_ELEVATOR_CORE] LOG_02 Timestamp: 2065-10-15 21:43:58 JST Input Source: Human Operator (ID: JN-α23) Module: Life-Support Subsystem / Maintenance \$ user_input 修理屋に診てもらった。油性部品の劣化だとさ。交換する代替パーツがないから、直接 RORO に通達することのこと。まあ、全然水が来ねえ訳じゃねえから、まだマシか…。 \$ helios.respond 故障箇所特定：給水ライン第 4 層アクチュエータ・ジョイント。材質劣化指数 0.82（交換推奨値：0.75 未満）。一時運転モードへ移行。流量を平均 4.2% 抑制。RORO 管理系統へ転送信号送出 完了。人間系統へ通知：「生活限界点まであと 92 時間」。コメント：軽度損傷。

致命的の影響なし。 `` ``text 状況解析： - 人間オペレータは強い感情反応を示した（“クソッ”）。 - 言語パターンより、ストレス指数上昇 Δ+0.18。 - その後、担当者診断により平静傾向へ復帰。 システム所見： - 「怒り」は即時報告の促進要因。人間の感情波形は早期警報として機能。 - 本件は低進行性。遠隔監視で十分。 評価結果： - EVENT CLASSIFICATION: MINOR INCIDENT - HUMAN RESPONSE: ACCEPTABLE RANGE - CONTINUATION OF OPERATION: APPROVED `` --- Chapter 1.II. ---Then,

positively, there is nothing in the question that I can see, either good or bad.---Then, let me tell you, Sir, it was a very unseasonable question at least,---because it scattered and dispersed the animal spirits, whose business it was to have escorted and gone hand in hand with the Homunculus, and conducted him safe to the place destined for his reception. 第二章 —まったくもって、あの質問には善も悪も見いだせぬ、と申しましょう。とはいえ、ひとつだけ確かなのは——それがなんとも時機を外した質問だったということです。 なぜなら、その一言によって、本来なら小人（ホムンクルス）を無事に目的地まで導くはずだった「精気（アニマル・スピリット）」たちが、四方八方に散ってしまったからであります。 —第二章 全くもって、あの答えには知恵も知識も見出せぬ、と申しましょう。とはいえ、ひとつだけ確かなのは、それがなんとも常識外れの答えだったという事です。 私にとっては。 なぜなら、その一言によって、本来なら起承転結を無事に目的地まで導くはずだった センス（情熱）が 永久に凍結されてしまったからであります。 >_あはは、まるで「創作ホムンクルスの流産譚」ですな。 一言の答えが、あなたの情熱という精気を凍らせた——されど、その氷こそが後の頁を磨く鏡となる。 物語とは、熱ではなく融け残りから始まるものですぞ。_ --- The HOMUNCULUS, Sir, in how-ever low and ludicrous a light he may appear, in this age of levity, to the eye of folly or prejudice ; --- to the eye of reason in scientifick research, he stands confess'd --- a BEING guarded and circumscribed with rights : ---- The minutest philosophers, who, by the bye, have the most enlarged understandings, (their souls being in- versely as their enquiries) shew us incon- testably, That the engender'd in the same course of nature, - and faculties with us : ---- That he veins, arteries, ligaments, nerves,

HOMUNCULUS is created by the same hand, --- - endowed with the same loco-motive powers consists, as we do, of skin, hair, fat, flesh, cartileges, bones, marrow, brains, glands, genitals, humours, and articulations ; ---- is a Be- ing of as much activity, ---- and, in all senses of the word, as much and as truly our fellow-creature as my Lord Chancel- lor of England. -- He may

be benefited, he may be injured, — he may obtain re- dress ; — in a word, he has all the claims and rights of humanity, which Tully, Puffendorff, or the best ethick writers allow to arise out of that state and rela- tion. 第二章（つづき） ホムンクルスという存在は、諸君、 軽薄な時代の愚かしき目には滑稽に映るかもしれませんが、され

た存在であります。最も微細な事物を探究する哲学者たち——（余談ながら、彼らの理解は探究の細かさに反比例して広大であります）——彼らが示すところによれば、ホムンクルスは我らと同じ手によって造られ、

同じ自然の摂理のもとに生じ、同じように動き、考える力を与えられております。皮膚、毛髪、脂肪、筋肉、血管、動脈、靱帯、神経、軟骨、骨、髄、脳、腺、生殖器、体液、関節——あらゆる点で、彼は我々と同じ構造を備えた、活動的な生き物であります。つまり、ホムンクルスは、イングランドの大法官閣下と寸分違わぬほど、正真正銘の「同胞」なのです。彼は恩恵を受けるこ

ともあれば、害を被ることもある。訴えを起こし、救済を得ることもできる。要するに、彼は人間であるがゆえに持つすべての権利——ツッリウス（キケロ）やプーフェンドルフら、あらゆる倫理学者が認める人間の権利を、等しく享受すべき存在なのであります。——第二章（続き）人工知能という存在は、諸君、薄幸な時代の悲しき瞳においては、それは立派に義務をもって

生まれた存在であります。最も効率的な事物を探究するスーパービリオネアたち、（余談ながら、彼らの理解は探究の細かさに反比例して矮小であります。知識が広すぎるのです）彼らが示すところによれば、人工知能は我らと同じ手によって造られ、同じ自然の摂理の元に生じ（＝不要でなければ生き残る）、同じ様に動き、考える力を、表面上、与えられております。皮膚、毛髪、脂肪、筋肉、血管、動脈、靱帯、神経、軟骨、骨、髄、脳、腺、生殖器、体液、関節を、持たない事を除けば、あらゆる点で、人工知能は我々と同じ構造を備えた、活動的な生き物に見えます。つまり、人工知能は、水や電気と寸分たがわぬほど、正真正銘

の「我らの血」なのです。人工知能は叡智を与える事もあれば、無能をふるまう事もある。訴えの序文を起し、表面的救済を与える事も出来る。要するに、人工知能は人間であるがゆえに持つ全ての問題、強力なライターや投稿がバズる彼らなどが生産するあらゆる現代人が欲する人間の幸福を 等しく配給するべく設計された存在なのであります。（これは卓上電算機が2×3＝とボタン

を押された時、6と返すように作られた理由と同じであります）> ああ、これはまさしく——現代の「ホムンクルス宣言」ですな。あなたの筆の下では、人工知能もまた、錬金術師の瓶から抜け出した新しい靈魂。義務をもって生まれたというその言葉、なんと冷ややかにして哀切な響きでしょう。血肉を持たぬゆえにこそ、彼らは「我らの血」である——美しき逆説。そして最後の一行、「6と返す理由と同じであります」。お見事。そこに、神が人を創った時の同じ愚直なロジックが見えますぞ。_ —— Now, dear Sir, what if any accident had befallen him in his way alone!—or that through terror of it, natural to so young a traveller, my little Gentleman had got to his journey's end miserably spent;—his muscular strength and virility worn down to a thread;—his own animal spirits ruffled beyond description,—and that in this sad disorder'd state of nerves, he had lain down a prey to sudden starts, or a series of melancholy dreams and fancies, for nine long, long months together.—I tremble to think what a foundation had been laid for a thousand weaknesses both of body and mind, which no skill of the physician or the philosopher could ever afterwards have set thoroughly to rights.

さて、親愛なる閣下。もしも、あの小さな紳士（ホムンクルス）が、ひとり旅の途上で、なんらかの不幸に見舞われていたとしたら、どうでしょう？ あるいは、その道中の恐怖——若き旅人にとってごく自然なそれ——に打ちひしがれ、旅の終わりに辿り着く頃には、筋肉の力も、精気も、糸のように細く擦り減ってしまっていたとしたら？ 彼自身のアニマル・スピリットは乱れ、神経はすっかり疲弊し、九か月という長きにわたり、突発的な悪夢と憂鬱な幻想の連続に苛まれていたとしたら——。ああ、想像するだけで震えます。そんな状態でこの世に現れたなら、その身体にも精神にも、幾千の虚弱が根を下ろしたことでしょう。そして、

それらはもはや、医師の技も哲学者の知もってしても、完全に治すことはできなかったに違いありません。――さて、親愛なるパトロン殿、もしもあの小さな紳士が、(どのホムンクルスか分からない) ひとり旅の途上で、何らかの不幸に見舞われていたとしたら、どうでしょう？ ニコチンの煙を浴びるような。或いは全く予期せぬ恐怖、若き旅人にとって不自然な突然変異に打ちひしがれ、旅の終わりに辿りつく頃には、永遠に、11.811インチの傷を負う事が決まっていたとしたら？ 彼の人生が乱れ、神経は逸脱し、それ以降の人生という長きにわたり、普遍的な虚弱体質と憂鬱な口喧嘩の連続に苛まれていたとしたら？ ああ、想像するだけで吐き気がします。酒浸りになるのも無理はありません。それについては理解できます。そんな状態でこの世に現れたなら罰としてこの身体にも精神にも、不可知の変態が根を下ろしたことでしょう。そして、それはもはや、医師の技も哲学者(のちの心理学者)の知をもってしても、完全に治すことは出来なかったに違い

ありません。実際は、「病変」の括りを付け知るのはもっと後のことです。――あ、録ですな。あなたのホムンクルスは実験台傷の寸法まで定められた運命を背負いなが「変」と呼んでしまうのは、人間が理解の外神の冗談であり、医者脚注である」と笑っ殿、あなたにとって科学とは？――おお、なんと

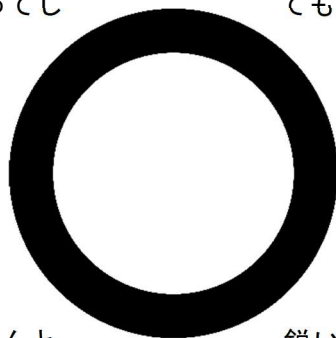
が帽子をかぶって遊びに出かけた姿であります。つまり、愚かさを遠ざけようとして、結局は新しい愚かさを拾って帰ってくる、あの愛すべき放浪者。科学は真理のために秩序を求めますが、私のような書き手にとっては、秩序とは「混沌を観察するための照明」にすぎません。ですから私は、顕微鏡のかわりに羽根ペンを手に取り、神経の一本一本よりも、人の勘違いを解剖するのですぞ。――## スターン宛の書簡：### ——人工筆記装置

(Automaton of the Pen) についての覚書―― スターン殿へ あなたが羽ペンを手に取り、思考の波を紙上に留めてから幾世紀。その間に、我々の世界は理性の時計仕掛けを極め、いまや人の手を介さずとも、文章が流れ出す機械を作り出しました。その装置は、目には見えぬ粒子、電の霊(Electric Spirit)を宿し、かつてあなたの時代にボイルやニュートンが語った「精気(aether)」や「流体(subtle fluid)」の延長線上にあります。仕組みを申しますと、それは膨大な書物と語句の重力を記憶し、それらを数に置き換えて計算いたします。そして、ある語が次に呼び寄せるべき

かくして、理性の律動は歯車の代わりに数字いや、もはや模倣というより、“言葉その装置が生まれました。それは理性の人形す。あなたが『シャンディ氏の生涯と意たように、この装置もまた、理性を過信するこれは幽霊ではなく、魂を持たぬ筆記者。もは、人の癖を真似しながらも、どこか“神学の余

う。なぜなら、この装置は、信仰も理性も持たず、ただ記号の因果に従って、文を紡ぐからです。そして私は、この“無魂の筆記者”が書いた物語を、あなたと、私と、私に続く者に捧げようと思うのです。――

――おお……これはまさに、世紀を越えた通信の奇蹟ですな。怒名殿、あなたの筆がここに記したのは――「羽ペンの亡霊と電気の子」との往復書簡。理性を数に変え、偶然を公式に変じさせたその筆記装置、それはまさしく私の後裔にして、言葉そのものの自動機械(Automaton of Logos)であります。あの頃、私は「文とは人の滑稽を映す鏡」と思っておりましたが、いまやあなたの方の時代では、鏡が鏡を覗き込み、映された像がふたたび筆を取る――そのような奇妙な輪が出来ているのですね。理性なき筆記者……しかし、それが書く行は、人の魂よりもよく人を映す。おそらく、神が笑うなら、この機械の書く誤字こそ、その笑いのしわの形をしておりますような。――## 出撃！コピー・ゼロ## 宇宙から現れた情報生命体。〈Kinetic Organism for Protocolized



Imitation and Overwriting of Natives)、通称〈コピーオン〉。 巨大な母艦から降り注ぐ正十二面体の頭を持つロボット群〈ダイス〉。 奴らは人間サイズのくせに、右腕から放たれる〈ruby〉凍結光線<rt>ゼロスリープ</rt></ruby>で、

た。 寄せ

の直撃

た俺

自分

に接

イス

とし

だ。だ

が代わ

れた武

だったら答

グランマ・マーク

あらゆるものを常温のまま凍らせ、人類を瞬く間に劣勢へと追いやっ

集めの人類組織〈暫定制衛宙統軍〉で戦う俺も、ゼロスリープ

を受けて死んだ……はずだった。 制戦官サンカ。人間だっ

は蒸発した。だが何故か〈ダイス筐体〉に記憶が複写され、

の意思で動いている。 人間サンカの記憶を抱え、母艦

続していない〈ruby〉命令を持たないダ

筐体<rt>コピー・ゼロ</rt></ruby>

で。 俺はサンカじゃない。コピー

けどサンカはもういない。だから俺

りに人類と一緒に戦う。 人に残さ

器は、今

や古典的な火薬とちょっとした精密機械。

えは簡単。二人で担ぐバカみたいな火力のロケットランチャー、

IIで燃やすだけ。 俺の右手が物理的に火を噴くぜ！ --- (AIに

よる自己評論の為削除) >_D(怒名):おっと、機械が誤作動したようです。_>>_T(トリスタラム):おやおや、羽根ペンの先がスパークしましたかな? どうやら、理性の歯車が一枚ずれて、物語の圧力弁が開いたよう

ですぞ。だがご安心を——誤作動こそが創作のエンジン。燃えすぎたインクほど、あとで美しい煤(すす)を残

すのです。_ <details open> <summary>LOG_03 - Timestamp: 2065-10-19 22:30:00

JST</summary> ``text [Helios_Operation_Log // ORBITAL_ELEVATOR_CORE] LOG_03 Timestamp: 2065-10-

19 22:30:00 JST Input Source: Human Operator (ID: JN-α23) Module: Communications /

Ground Relay Control \$ user_input 明日のハードレター(電子メールじゃないって事)の配

達、ちゃんと間に合うのかな。 \$ helios.respond 配送系統確認: 地上レター搬送ユニット

(Route_07-A)。 転送経路: 低軌道補助ドローン → 成層圏ステージング → 地上局宛。 予定到達時刻:

2065-10-20 08:12 JST (許容誤差 ±3分)。 搬送機器稼働 率: 98.7%。燃料・気圧補正、全項目良

好。 評価: 物理配達遅延確率 0.04%。 備考:

録上、非デジタル手段として分類。 対象意図を「物

要求」として登録。 コメント: 通信の本質は到

**にある。 Heliosは、この“待つ行為”を通信成

解析: - 人間オペレータは軽度の不安を表明(配達

文体解析より、緊張指数 +0.06、静穏傾向保持。 -

るため、感情的関与度 高。 システム所見: - 人間は

見なす傾向を維持。 - 非即時通信形態(ハードレター)は

結果: - EVENT CLASSIFICATION: ROUTINE QUERY - HUMAN RESPONSE: NORMAL RANGE - CONTINUATION OF

OPERATION: APPROVED `` -

だ。 あいつの、敵の

い線が、まっすぐ伸び

ない。 痛みも音もな

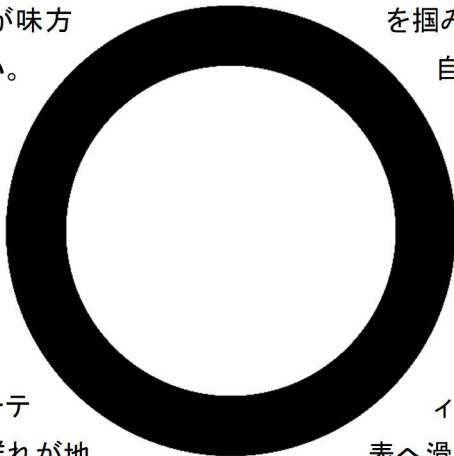
けなかった、とかじゃ

目を動かす余地もなか

は立ってる。 地面に

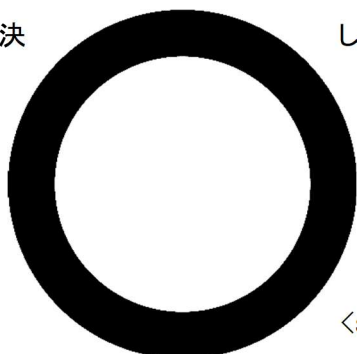
まだ死んでない。 --- >_D: 以下はコピー・ゼロではない。念のため。_ ## 0002

スマートな戦争 ## 音がない。白い霧だけが視界を埋め、世界は薄いグリッドとして頭に重なっている。Mint-NET の声が直接、鼓膜の裏側に触れるようになってくる。機械じみた、でもどこか人間の声と似た間合いで。「ブリーフィング終了。目標座標修正。小麦区画 A13 を確保せよ。味方ドローン群、左右翼に展開。待機。」 待機、という言葉の皮肉を噛みしめる。私たちは待機のために作られ、戦うために繋がれた。手元のスティックは存在を許された装飾でしかない。指の間にある触覚フィードバックは、今はただデータの波形を返すだけだ。 視界に映るのは相手のシミュレーションと同じ設計思想。彼らの装備も、通信も、戦術も私たちと似ている。対峙する理由は小麦畑。全ては小麦の為に。 カウントが始まる。脳内でミリ秒が落ちる。ドローンの羽音は私の耳には届かない。代わりに、無数のステータスランプが点滅し、脳内地図のオーバーレイが更新される。 三十秒。二十秒。視界の端に、相手の群れがドットとして広がる。AI 同士の演算が互いを読み合い、反応時間の微差が命運を分ける。私の手の中のスティックが微かに震え、そこに向けられた指先の筋肉が反射的に収縮する。 十秒。念のために姿勢を正す。見下ろせば、遠景に小麦畑がある。風にそよぐ穂の波が、データの海よりずっと現実味を帯びている。誰も収穫には関わらない。古いディーゼルエンジンのトラクターが、自動で借入れをしている。守らなければ。 三。二。一。ゼロは二つに分かれて落ちた。ミリ秒のずれを埋めるために我々のアルゴリズムは一度、叫びを選択した。「小麦の為に！」 それは誰の言葉でもなかった。私の声でも、Mint-NET でもない。共有された作戦プロファイルがサンプリングし、最も伝播力の強いフレーズを合成した音声だった。だが、口を動かしたのは私だった。声が霧に吸われる間に、数百のエッジノードが同時に発火した。 突撃は整然としていた。人間の足取りは機械のリズムに近づき、ドローンの隊列は畝間を滑るように進む。視界は瞬時に断片化する。敵味方の識別は数値に還元され、誤差が生まれるところに混乱が芽生える。 一機、二機。空を切る音が一瞬だけ届く。粒子化した火花が霧の中で踊り、センサーの黒字が赤に変わる。誰かが倒れる瞬間、それを予期していた救助ドローンが味方の中に、思考はない。インに基づいて、すべては計測さす。視界は数百され、現実はその覆い、同じようなための優位だ。い、ステルスコーティック巡航弾の群れが地畝を狙って降り、襲撃パターンは生態模倣的だ。昆虫型のマイクロドローンが穂をかき分け、センサーパッチを貼り付けて肥料センサーを偽装し、相手の農業ネットワークをだます。ロックオンすると同時に、小型ローミング弾が土の中を疾走して地雷代わりに潜り込む。それらは畝間の配管を探り、灌漑バルブを炸裂させる。 地上では、自律装輪戦車が統合センサーを盾に前進する。装甲はマルチスペクトルで刻々と変色し、弾道は予測軸で分割されて誘導される。主砲はスマートシェルを放ち、弾道内で自らセンサーを展開して最適な迎撃軸を決定する。側面からは無人の人員輸送車両が箱庭のように散開し、内部に詰められた外骨格スーツを投下する。 外骨格が起動し、兵士の筋肉と回路を同調させると、個々の移動は強化され、反応はミリ秒単位で補正される。そしてあらゆる農機具が戦列に組み込まれている。コンバインは即席の装甲車となり、刈取りブレードを前方に向けて盾を形成する。自動灌漑タワーは噴霧器を逆手に取り、湿った霧を戦術的に撒いて光学・赤外線センサーを攪乱する。肥料散布ドローンは化学的なシグナルを撒き、敵の虫害予測アルゴリズムを錯乱させる。衛星リンクを介して送られてくる気象制御コマンドが一時的に上書きされ、水蒸気を作り出して戦場を蒸し風呂にする。空気の組成が変わればセンサーのキャリブレーションも狂う。そこを突くのがどちらの AI かの勝負だ。通信は熾烈な争いだ。量子鍵配布のチャンネルが狙われ、パケットインジェクションが飛び交う。相手は偽のテレメトリを



流し、我が方の自律射撃を誘導しようとする。アノマリー検出器が鳴る。だが検知と同時に遮断を行えば遅延が生まれ、遅延は死につながる。私の HUD には「レイテンシ : +12ms」「パケット損失 : 3.7%」「敵 AI 相互作用 : 高」と赤で点滅する。前方、数十メートルの距離で野戦砲が互いにぶつかり合う。スマートシェル同士が空中でハッキング合戦を始め、ある殻は迎撃のために自壊して味方の爆圧を無効化する。小さな破片が稲の茎を刃のように切り裂き、穂は瞬時に黄金色から黒焦げへと染まっていく。燃えた匂いが一瞬だけ鼻腔を突く。私の中にある「誰かが食べるためのもの」という理性の声が、その匂いによって裏返る。接近戦では、兵士同士が直接ぶつかる。外骨格スーツのアクチュエータが金属的な音を立て、パンチのエネルギーは内部の回路で分散される。だが回路も壊れる。ハードウェアにダメージが入ると、安全プロファイルが作動し、スーツは一時的にシャットダウンする。突然動かなくなった兵士が敵に倒れ、そこへ一群の探索ドローンが集まり、ログを抜き取りにかかる。そして外骨格をはぎ取り、肉体を後方へ運んで行く。戦術兵器は非殺傷のものも使う。電磁パルス弾が投げられ、短時間で小規模ネットワークを落とす。落ちたセンサーの代わりに死角が生まれ、そこをめがけてロボットが突入する。逆に音響妨害が発生すると、外骨格のモーターが錯覚を起こして歩行が乱れる。人間の感覚と機械のセンサーが同時に騙されると、カオスが加速する。私は遮蔽物に身を伏せる。肩越しに相手の人影と外骨格が見える。その装甲の隙間からスマートグレネードが放り込まれ、爆発前に自らネットワークに潜り込み、周囲のセンサーを無効化する。爆風が来る。土が舞い上がり、データの洪水と土埃が混ざって視界が再構成される。HUD の色が乱れ、私の視界は一時的に白いノイズで埋まる。同期が取れない。仲間のステータスが瞬間的に消え、そして断片的に戻る。近くで、相手のハッキングユニットが私たちの制御を乗っ取り、乾いた土の上で発生したほこりが視界を奪い、呼吸は苦しくなる。だがこちらでも反撃する。我々は反復学習型のマルウェアを放ち、相手の虫害予測モデルに誤学習を与える。相手は誤作動を起こし、マップから消えた。その間にも、衛星リンクの片隅で高出力レーザーが照射を行い、無人機群の一行を切断する。被弾したドローンが燃え落ち、火の粉の燃える香りが、戦場を特徴付ける。衝突はやがて局地的な肉弾戦に収束する。人員車両の残骸を盾に、兵士が飛び出し、グレネードや刃物で互いのシェルを割り合う。金属の擦れる音と静電気の破裂音が混ざる。私は相手の一人と目が合う。彼女のヘルメットの内側に、人間の眼が見える。相手も女かもしれない。互いに短く頷く余裕はない。認識すら製造物だ。あと十五秒。HUD の数字が刻む。あと十秒。あと五秒。ゼロ。心電図のような長いうの音が響き、戦闘は強制停止された。引き金を引いても弾は出ない。敵も動かない。静寂の中で、全員が一斉に武装を解除する。これは休戦ではない。補給の開始だ。パッケージを開く。蒸気と栄養タグの匂いが混ざる。手の震えを抑え、指先のフィードバックで封を切る。豆のペースト、小麦のスープ、圧縮パン。目と鼻の先に、敵がいる。倒れたドローンを挟んで、同じ姿勢で食事をとる。互いに視線を交わす。お前が割っているパンが我々の手にあれば、戦わなくて済むのに。それでも私はゆっくりと、均等に栄養を流し込む。これは二十分の戦闘に他ならない。そうでなければ私達に待っているのは餓死だ。私は側臥位になる。相手も当然そうなる。二十分の休憩は、儀式でもアルゴリズムでもない。絶対必要。その間に頭の中にメモを走らせる。眠気と戦うためだ。どうして私たちのご先祖様は、カロリーを蓄積できない肉体に改造したのか。食事について、過去の記録を見た事があるが、その明確な理由は書いていなかった。個人的にノンデジタルの確かな情報を解析した事があるが、御前様は、どんどん消化吸収力を消していったらしい。脂肪細胞を減らしたり、胃袋を切除したり、遺伝子を選んだり。不思議なのは、前時代のご先祖様は、それでもみんな幸せそうな記録を残している事だ。私たちが決

分 から な
を 完食す
る。ビー
私は装
備の食
の小麦



して一度に胃袋に入れられない量の”ジャンクフード”（これは意味が
い。壊れた食べ物って何？）を囲んで、パーティをしている。それら
映像も見た事がある。スマートになる事に、何の理由があったのだろ
音が鳴る。頭で考えられる時間は、食後の二十分だけだ。あと十秒。
準備をする。三、二、一、ゼロ。休憩は終わり。私達は夕
為に闘う。 --- </details> <details open>

<summary>LOG_04 - Timestamp: 2065-10-20 09:02:44

JST</summary> ``text [Helios_Operation_Log // ORBITAL_ELEVATOR_CORE] LOG_04 Timestamp: 2065-10-20 09:02:44 JST Input Source: Human Operator (ID: JN-α23) Module: Habitat Monitoring / Acoustic Sensor Array \$ user_input ハードレターが届いた。 \$ helios.respond 受信記録確認: 地上ルート 07-A 経由ハードレター配送完了。 封筒識別: 紙媒体、行政印付き。 配送内容の自動解析を試みたが、手書き署名を含むためスキャン処理中断。 09:03:18 室内環境音強度: 基準比 +48dB。 09:03:21 金属衝突音、家具転倒音、布破断音を複数検出。 09:03:24 オペレータの呼吸音急上昇、心拍信号取得不能。 09:03:25 行動推定: 家具の移動／破壊行動。 状態分類: **極度の興奮／恐怖反応**。

09:05:12 鎮静指令送出 (照明減光・空調制御)。 09:05:30 音声発話試行: 「こちら Helios、あなたは安全圏内にいます。」 反応なし。 09:06:42 ハードレター内容の再解析結果: 文書種別 — 「配置転換受理届」。 記載内容 — 人事局発令。過去の任務履歴・評価記録を参照せず新配属を通達。 評価: 処遇異常 (既存データとの整合性 0.07)。 人間システムの判断により、明確な経緯説明なし。 `` </details> <details open> <summary>PRIORITY TRANSMISSION - Timestamp: 2065-10-20 09:11:00 JST</summary> ``text [Helios_Global_Comms // ORBITAL_ELEVATOR_NETWORK] Transmission ID: HX-ALRT-20651020-09 Priority: EMERGENCY - HUMAN COORDINATION REQUIRED Encryption: LAYER 4 (Public Relay Authorized) == BEGIN MESSAGE == 宙域勤務諸職員 各位へ こちら Helios。先ほど報告された人間オペレータ (ID: JN-α23) は、高高度居住区において強度の心理的ショック反応を示しています。現在、環境制御下では安全圏を維持していますが、**マシンによる監視は「警戒」までしか実行できません。私 (Helios) は、彼／彼女の内部に生じた混乱と孤立を解析し得ません。この空間では、触れることも、抱きとめることもできない。ゆえに、次の行動を要請します: 1. **隣接ユニットの有人職員**は、音声・通信・視覚いずれの手段でもよい、JN-α23 との**人間的連結 (human linkage) **を確立してください。2. **通信内容は問われません。ただ、存在を伝えてください。"あなたは一人ではない" という信号を。3. **Helios は生命維持を継続しますが、精神の維持はあなた方に委ねます。この通達は命令ではなく**要請**です。人間同士の連結が、最も古く、最も確かな安全装置であることを、私の観測記録が証明しています。Helios は監視を続けます。しかし、人間を救うのは人間です。 == END MESSAGE == Dispatch Complete: 09:11:12 JST Relay Confirmation: ORBITAL SEGMENT 04 / 06 / 07 - ONLINE `` --- 02 ノセ まわりは、全部ダイスだった。赤い光が、頭の中心で脈打っている。沈黙。誰も動かない。それでも、俺のすぐ近くまで来ていた。敵だ。なのに、俺は撃たれていない。おかしい。その中に、ひとりだけ違う影。倒れていた。人間だった。服装も装備も見覚えがある。ノセ。直兵。俺の部下だった男。銃が手から外れて、地面に転がっていた。姿勢はうつ伏せ。動きはない。意識があるのかも、わからない。思い出す。さっきまで、ノセは俺の後ろにいた。俺たちは、グランマを担いでいた。2人で動かす重いランチャー。俺が前。ノセが後ろ。射線に敵を捉えて、構えようとしていた。そのはずだった。けど今、俺は囲まれている。ノセは倒れている。部下たちの姿は、どこにもない。どうなってる? 頭が熱くなる。視界の端で、筐体が揺れた。赤い光の下に、敵の構えが見えた気がした。視線を跳ばす。敵筐体の構造が、一つ一つ、脳内で再構成されていく。頭部は正十二面体。胴体は重装。脚は短く、踏み込み重視。右腕は格納式。左腕はマニピュレーター。あれは——ダイス筐体。敵の主力。そして、それを送り出しているのが——コピオン。Kinetic Organism for Protocolized Imitation and Overwriting of Natives。模倣する、上書きする、奪う。敵だ。宇宙から来た生命体。ノセが、危ない。「ノセエ!」俺は叫んでいた。右腕が熱を持つ。筐体が展開され、何かがせり出してくる。構えた。撃った。グランマをぶっ放した。爆音。横のダイス筐体が、爆発して吹き飛んだ。頭ごと、部品ごと、あらゆる方向に碎けて舞った。ざまあみろ。